

SDGs × Gakken

最近、テレビや新聞、街なかでも
見かけるようになった“SDGs”という言葉。
「SDGsって何?」「ESDとどう違うの?」
そんな疑問にお答えします。
また、学研のSDGsとの関わりについても
ご紹介します。

Contents

● 持続可能な開発目標にこそ、世界を変える力がある …	1
● SDGsは国連初のコミュニケーション・デザイン ……	4
● SDGs×教育の目的 ……	6
● 中学・高等学校×SDGs ……	8
● 道徳教科書×SDGs ……	10
● 保健体育教科書×SDGs ……	12
● 幼児月刊絵本×SDGs ……	14
● Gakken×SDGs ……	16

より多くの学校、先生、子どもたちに関わってほしい 持続可能な開発目標にこそ、世界を変える力がある



国連広報センター所長
根本かおる

「持続可能な開発目標（SDGs）」は、2030年までに先進国も開発途上国も協力してこの世からあらゆる形態の貧困をなくし、経済・社会・環境のバランスを大事にして後世につなげていくことのできる未来をつくろうという、17のゴールからなる世界目標です。2015年9月に国連で採択され、今年で実施4年目に入り、前進はあるものの、より規模感とスピード感をもって取り組まなければ達成できないという現状が浮き彫りになっています。

SDGs誕生の背景には、「このままではこの美しい地球を、豊かな社会を将来世代につないでいけない」という強い危機感がありました。貧富の格差が先進国内でも途上国内でも国と国の間でも広がっています。経済のグローバル化は概ね人々の生活を便利にして世界を豊かにしましたが、その恩恵は平等には行き渡っていません。ソーシャルメディアの発達で、腐敗や不公平のニュースは瞬く間に拡散され、人々の間に不平等感と怒りを植えつけ、格差と不満が社会を不安定にさせます。紛争の数が増え、安全を求めて移動する難民・避難民の数は、第2次世界大戦以降最高の水準になり、移民・



難民への偏見や排他主義があらゆる地域で広がっています。さらに、今世紀に入って気候変動が「人類の存亡を左右する脅威」として猛烈なスピードで深刻化しています。小さな島国では地球温暖化による異常気象や海面上昇などの影響で移住がすでに現実のものとなり、日本でも台風の大規模化、水災害の増加が顕著です。

SDGsは極めて野心的で、2030年にあるべき社会の姿からバックカスティング*して行動することを求めています。国も自治体も企業もNPOも学校も、そして個人も、あらゆるアクターが全力を尽くさなければとても到達できるものではありません。私がさまざまな機会をとらえて「SDGsを自分事に」と強調しているのは、このような背景があるからです。世界レベルで課題を考え、世界と自分の足元とをつなげて自らの行動を起こす「Think Globally, Act Locally」の精神が重要になります。

例えば、2017年の第1回「ジャパンSDGsアワード」で最高賞を受賞した北海道下川町は、人口約3400人の少子高齢化に直面する自治体です。豊かな森林資源を生かした木材・木製品の生産、森林の健康や教育への活用、バイオマスの再生エネルギー*の活用や、熱供給システムを核としたコンパクトタウン化などに取り組み、最近では人口が純増に転じています。町民を巻き込みながら、SDGsのゴール・イヤーを意識して「2030年における下川町のありたい姿」をとりまとめています。

「誰一人取り残さない」

さらに、SDGsの大原則として知っていただきたいのは「誰一人取り残さない」という考え方です。すなわち、置き去りにされがちな少数者の存在を認識し、こうした人々を最初から包摂すること。SDGsについて講演すると、参加者の方からこの大原則に強く賛同するという声をよくいただきます。一人ひとりの尊厳と個性を貴ぶ姿勢は、不寛容の風が強く吹く今だからこそ、置き去りにされがちな人々の間で深い共感を生むのでしょう。人権に根差した「誰一人取り残さない」という原則の力を実感しています。

*バックカスティング…未来のある時点に目標を設定し、現在すべきことを考える方法。

*バイオマスの再生エネルギー…化石資源を除いた生物由来の有機性資源を用いて永続的に生み出せるエネルギー。化石資源と違って、温室効果ガスを排出しない。下川町の場合は未利用森林資源をエネルギー化している。



① 2015年9月、国連サミットでSDGsが採択されたとき、アメリカ・ニューヨークの国連本部・事務局ビル壁面にSDGsのロゴを映したプロジェクションマッピング
UNPhoto/Cia Pak

SDGsの実践に向かい合うと、課題相互、担い手同士つながりへの意識が深まり、物事をつながながら統合的に考える力や、思いとリソースやネットワークを持った人同士を結び付けてより良い方向を目指すプロデュース力が鍛えられます。SDGsという包摂的な枠組みを通じて、より大きな波及効果を目指すつながりが生まれることを期待しています。

日本の小学校で2020年度から、中学校で2021年度から学習指導要領にSDGsが盛り込まれ、児童生徒は皆SDGsについて学ぶことになります。皆さんには、「ザ・正解」というもののない課題について、柔軟な頭と大胆な行動力で、まずは日々の暮らしの中で気になることから思考を深め、自分にできるアクションに取り組んでいただければと思います。毎日の暮らしの中で手にする商品が、どこでどのように作られて手元に届けられたのか考えることから始めるのもいいでしょう。児童生徒の学びを後押しする書籍を学校の図書館が特集して紹介することもできるでしょう。可能性はまさに無限大です。

児童生徒が担い手に

未来の子どもたちが歴史を振り返るとき、SDGsを

ポジティブな遺産として感じてもらえるよう、将来世代の芽を摘むことなく多様な人々が自分らしく暮らし、いける社会の実現に、今の児童生徒にも担い手として行動してもらいたいと願っています。さらに、想いの熱量が突破力を生むことがあります。2018年の第2回「ジャパンSDGsアワード」最高賞に輝いた日本フードエコロジーセンターの社長は、受賞理由である「食品廃棄物の処理とリキッド畜産飼料の製造をつなぐ循環型のビジネスモデル」について、「10歳のときに持続可能な社会への貢献について書いた作文が原点にあり、子どもの頃からやりたかったことを仕事にしている」と語っています。

スウェーデンの少女、グレタ・トゥーンベリさんをご存知ですか？ 彼女は「子どもたちの将来を奪わないで」と政治家たちに気候変動問題のリーダーシップ



① 国連気候行動サミットのオープニングで講演するグレタ・トゥーンベリさん（右）。左端はアントニオ・グテーレス事務総長。
2019年9月 UNPhoto/Cia Pak



を求める座り込みをたった一人で始めました。「Fridays for Future」というこの動きは、瞬く間に世界各地に広がっています。気候変動が与える影響は深刻で、2018年10月、世界の著名な科学者たちが「このままでは早ければ2030年にも世界の平均気温は産業革命前と比べて1.5度上昇する」と警鐘を鳴らし、世界に衝撃を与えました。同時に科学者たちは、1.5度上昇と2度上昇の世界を比較しつつ、1.5度上昇に抑えることができれば、海面上昇や北極の氷の融解やサンゴの死滅などがある程度抑制することができ、地球を将来につないでいける可能性が広がることも示しています。それを可能にするのに必要な道筋は、2050年までに脱炭素を達成することです。

私たちが個人レベルでできることはたくさんあります。大量生産・大量消費・大量廃棄に基づくライフスタイルを見直すこともその一つです。使い捨てのレジ袋やプラスチック容器は使わない、食品ロスを減らし、地元の食材を食べ、服や繊維素材をリサイクルするなど、児童生徒たちが取り組めることもいろいろあります。東京2020オリンピック・パラリンピック大会も、都市鉱山によるメダル・プロジェクトや廃プラ由来の表彰台をはじめ、持続可能性を大会のレガシーに掲げています。

より多くの学校、先生、そして子どもたちにSDGsの協力の輪に加わっていただきたいと心から願っています。そして、「女の子だって学校に行きたい」と訴えてノーベル平和賞に史上最年少の17歳で輝いたパキスタンのマララ・ユスフザイさんや、前述のグレタ・トゥーンベリさんが示すように、ユースにこそ世界を変える力があるのだと児童生徒を導いていただきたいと思います。

根本かおる

東京大学法学部卒。テレビ朝日を経て、米国コロンビア大学大学院で国際関係論修士号を取得。1996年から2011年末まで国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）にて、アジア、アフリカなどで難民支援活動に従事。ジュネーブ本部では政策立案、民間部門からの活動資金調達のコーディネートを担当。WFP国連世界食糧計画広報官、国連UNHCR協会事務局長も歴任。フリー・ジャーナリストを経て2013年8月より現職。2016年より日本政府が開催する「持続可能な開発目標（SDGs）推進円卓会議」の委員を務める。著書に『難民鎖国ニッポンのゆくえー日本で生きる難民と支える人々の姿を追って』（ポプラ新書）他。



SDGsは国連初の コミュニケーション・デザイン

博報堂DYホールディングス 川廷昌弘

2015年9月25日、ニューヨークにある国連本部ビルの壁面に、カラフルなアイコンと各国の国旗がプロジェクションマッピングで鮮やかに映し出されました。これは、政府関係者のみならず、市民活動団体や経済団体など民間の意見を吸い上げて作成された『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』の最終文書に193のすべての国連加盟国が合意し採択したことを祝ったものです。アジェンダにはSDGsの17のゴールが示されており、国連本部はそれらをゴール別にシンプルでカラフルなアイコンで表現。2030年に向けた人類共通の指針として世界中に呼びかけました。

このアイコンはSDGsの採択前から公開され、国連機関は早くから活用し広がりはじめていました。これは、採択文書だけで全世界に共有することの難しさを経験上よく知る国連本部の危機感から、イギリスの社会貢献組織、映画監督のリチャード・カーティス氏、クリエイティブ・ディレクターのヤーコブ・トロールバック氏とも連携して制作したものだったのです。国連はさらに世界の有名人の協力を得て制作したメッセージ映像「We the People」なども配信するなど、国連の採択に合わせて全世界の全人類に向けたSDGsのコミュニケーション・デザインを行ったのです。これは前代未聞のことでした。

自分事化してできた キャッチコピー

SDGsに盛り込まれているのは、貧困や格差の撲滅、気候変動への対応など、いま世界が直面しているさまざまな社会課題であり、これまで議論されてきたことばかりです。つまりSDGsが新しいのは、環境・社会・経済の取り組みは互いに影響し合い繋がりががあるとして、これらの目標を達成するために、政府や国際

機関がトップダウンで呼びかけるだけではなく、民間企業や、社会でさまざまな役割をもつ人たちが、また市井に生きる私たち一人ひとりが、その目標を知り、理解し、行動に移していくことが欠かせないとし、誰もが共有できるコミュニケーション・ツールを用意したことです。そこで、広告会社としてさまざまな形のコミュニケーションを生業にしている私たち博報堂は、アイコンに添えられた英語のキャッチコピーの公式日本語版を制作することを考えました。というのも、国連の公用語は中国語、英語、フランス語、ロシア語、スペイン語、アラビア語の6カ国語で、残念ながら日本語は含まれていません。そのため、日本でアイコン

を活用するにあたってさまざまな解釈の日本語版が発生する可能性があり、そうすると、もとのメッセージがもつ伝達力が弱まって意味がぶれてしまい、普及の足かせになる可能性があると考えたからです。何より全世界の全人類が共有できるコミュニケーション・ツールが、日本では役割を果たせなくなるのではないかと心配をしたのです。

そこで、日本でSDGsのアイコンを管理する国連広報センターと協力して、ボランティアで日本語版を制作することが決まりました。まずコピーライターと行ったのは、17のゴールだけではなく、それぞれに紐づく具体的な169のターゲットを読み込み理解することでした。たとえばゴール12の「つくる責任つかう責任」については、「持続可能な生産と消費形態を確保する」という文がもとになっています。原文だと、企業が努力すること、という印象になってしまうかもしれませんが、実際は使ったものを分別して資源化したり、無駄をなくしたりと、消費者側の責任もある。読んだ人が実感できる言葉を開発しました。私たちが目指したのは「SDGsの自分事化」。そのために、

17のゴールと、その背景にある169のターゲットのエッセンスを凝縮させてキャッチコピーに落とし込むこと。コピーライターが作成した原案は、複数の国連機関をはじめ企業、NGO、JICA、外務省の担当者に見ていただき、意見を募り、議論を交わし、最終的にどの立場の人も「これならいいね」と言ってくれる平均点以上の言葉——誰もがわかる、“最大公約数の日本語”——を目指しました。いずれのケースでも「持続可能」という言葉は使用していません。サステナブルという外来語の翻訳語であり、本当の意味でまだ日本語化していないと判断したからです。

より良い世界への 羅針盤となるように

アジェンダのタイトルには「変革（transform）」という言葉が使われていますが、世界大戦や大恐慌といった場面以外で国連がこの言葉を使うのは非常に稀だそうです。それだけいま世界は危機に直面していて、国際社会が一丸となって解決しなければという、国連の並々ならぬ覚悟も感じます。そこに私たち広告会社が寄与できるとすれば、“より伝わる”言葉に落とし込み、皆さんに「もしかして私に呼びかけているのかな」と思ってもらい、SDGsに関心をもってもらうことです。また、何より重要なのは、これが2030年の達成目標だということ。未来の主役である子どもたちが、大人と一緒に考えて行動することができたらと考えています。このアイコンが、皆さんにとって、より良い世界に向かって力を合わせていくための羅針盤（コンパス）になってくれればと切に願っています。



川廷昌弘

1986年博報堂入社。テレビ番組「情熱大陸」の立ち上げに関わる。2016年からグローバル・コンパクトSDGsタスクフォースリーダー。環境省SDGsステークホルダーズ・ミーティング構成員、神奈川県顧問（SDGs推進担当）、一般社団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンSDGsタスクフォースリーダー等。写真家としても「地域の大切な資産、守りたい情景、記憶の風景を撮る」をテーマに活動する。公益社団法人日本写真家協会会員。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



SDGs×教育の目的

一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)
グローバル教育プロデューサー／調査・研究統括

木村大輔

世の中は正解のない問いで溢れています。私は25歳のとき、内閣府「世界青年の船事業」でインドを訪れました。街を歩いていたら小学校低学年くらいの汚れた格好の男の子がお金をくれ、何かくれとずっとついてきました。その子は流暢な英語を話していました。「君は英語を話せるのだから、勉強やもっと違うことをしなさい」と諭した記憶があります。その後、彼ら路上に暮らす子どもたちは、親に物乞いを強制されたり、人身売買の犠牲者だったりすると聞き、なんとも言えない複雑な気持ちになりました。それが私とSDGs (MDGs*) の出会いです。今でも、そのとき何をすべきだったか答えは見つかっていません。

SDGsと教育の役割

SDGsを学ぶことは、世界で起きていること、世界

がこれまで抱えてきた解決できていない課題を学ぶ機会となります。そして教育はSDGs達成のために担い手意識を育む重要な手段となっています。17のゴールには、全部で169の具体的なターゲットがあります。是非一度目を通してください。世界で何が起き、それがどのように自分たちの生活に関わっているか考えを巡らせるだけでも児童生徒への問いかけのヒントが詰まっています。

SDGsを教育で扱う上で意識してほしい三つのこと

SDGs教育の一つめの目標は、「学習者の行動変容」をもたらすことです。ゴール4「質の高い教育」のターゲット7 (SDG 4.7) には、持続可能な開発のための教育 (ESD) とグローバルシチズンシップ (地球市民) 教育、平和、文化、人権、ジェンダー、環境

などが挙げられています。このSDG 4.7がSDGs達成に必要な知識やスキルの習得、行動変容を促す教育活動です。世界の貧困や気候変動の事実を知っても、誰も行動に移さなければ何も変わりません。日々の教室の中で何か問題を見つけてもアクションがなければ何も変わらないことと同じです。

ユネスコは、グローバルシチズンシップ教育の学習目標として、

- ①認知領域 (知識、思考力)
 - ②社会・感情領域 (異文化、アイデンティティー、多様性等)
 - ③行動・行為領域 (倫理的責任感、個人または集団での行動、社会への関与)
- という三つの領域を扱いながら、児童生

徒の変容につなげることを掲げています。

SDGs教育で意識すべき二つめは、SDGsのゴールは一つひとつが相互につながっているということです。例えば、貧困だから栄養が不足していたり、子どもが家族のために一日何時間も歩いて水を汲みに行くことで学校に行けなかったり、気候変動による災害の被害を最も受けるのは脆弱な立場の貧困層だったりします。紛争や政治の不安定さによって発生する多くの難民も、社会保障や人権、職業などにおいて不平等な扱いを受けています。

三つめは、自分事にする工夫です。「～したらいいと思います」という他人事ではなく、自分事として「～したい!」という行動に結びつくような学習デザインを考えることです。教える教えられる関係ではなく、「もし君が～されたらどう思う? どうしてほしい? どうしたら良くなる?」といった問いを投げかけたり、先生も含めて一人ひとりが感じたことを共有したり、出てきた疑問や問いについて一緒に調べながら、一人の人間として社会に対して何ができるか考え、小さなことから試してみてはいかがでしょうか。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」、ユネスコ憲章の前文の最初の一節です。平和で持続可

能な社会の実現には、興味・関心の種を蒔き、違う視点や立場を理解し、相手の気持ちを尊重しつつ一緒に取り組む土台を作り、人の心を豊かにすることが大切です。この心 (社会・感情スキル) を豊かにすることで、自己肯定感、成績向上やいじめやうつ病率の低下など、その後の人生に大きな影響を与えるという調査もあります。

体育で対人関係構築能力の違いや多様性の受容を扱ったり、社会正義や持続可能な社会に大切なことを図工の時間で表現させたり、SDGsという「レンズ」を通すと教科横断学習にもなります。義務教育期の感受性は本質的です。地球市民として、児童生徒、先生同士、地域や保護者と一緒に理想の社会を作っていきますか。



木村大輔

青森県出身。日本大学文理学部卒業。金融機関、オックスフォード大学国際開発学部大学院、オーストラリア国立大学公共政策大学院を経て開発援助、グローバル教育分野に従事。専門はグローバル教育施策、学習デザインと学習評価。ユネスコバンコク事務所SDG 4.7関連会議メンバー。著作に「アジアにおける21世紀型コンピテンシー」(共著、アジアソサエティ)



↑高校生対象のSDGsの授業を計画する学生たち



フィリピンのスラムに住む子どもたち対象に、未来を描く教育ワークショップを実施する学生たち

(ユネスコ: "Preparing Teachers for Global Citizenship Education: A Template" よりGiFT訳)

*MDGs…開発分野における国際社会共通の目標。2000年9月に国連サミットで採択された国連ミレニアム宣言を基にまとめられた。

中学・高等学校 × SDGs “地球思考”から広がる多彩な活動

週に1時間、SDGsを掘り下げ、自ら解決方法を見出す活動をしている東京女子学園。
その内容と成果について、活動を推進する先生に伺いました。

SDGsを掘り下げる中学生

“地球思考”を理念としている東京女子学園中学校高等学校では、生徒が「いま生きている時代とこれから生きていく時代において地球規模の広い視野をもち、より善く生きる力を身につける」ことを課題として、教科はもちろん、そのほかのさまざまな学習や行事を総合的に結びつけた教育に取り組んでいます。

世界が抱える具体的な課題の解決に向けた取り組みであるSDGsは、“地球思考”にはまさに格好の題材であることから、同校では中学・高校それぞれにSDGsを意識した活動を積極的に取り入れています。

まず中学では、学年横断の活動として週に1時間、SDGsに関連する課題を見つけ、その課題を解決する方法を考え、発信する『地球思考プログラム』の時間を設けています。この活動を推進する黒川八重先生は、そのねらいを次のように語ります。

「課題を見出し、根拠に基づいて解決していくことで、必ずしも正解のない課題に対して『自分に何ができるのかを考え、自ら行動できる力』を身につけてほ

しいと思います」

当初はSDGsと言われてもピンと来なかった生徒たちは、まずカードゲームをしてSDGsについての知識を得ます。その後、新聞記事に目を向け、いろいろな記事がSDGsの17のゴールのどれに関連しているかを割り振っていきます。

こうしてSDGsに関する一般的な知識を身につけた生徒たちは、同じ興味・関心をもつ生徒同士でグループをつくり、課題を見出し、その解決方法を探っていきます。各班、たとえば「フェアトレードチョコレート」であれば、SDGsの1（貧困をなくそう）、8（働きがいも経済成長も）、10（人や国の不平等をなくそう）の目標が関連するといったように、SDGsのゴールにつながるテーマを決め、調べを深めていきます。その成果は、秋に行われる文化祭で、ほかの生徒や保護者に向けて発信されるのです。

そして、いよいよ一人ひとりが自分の取り組む課題を掲げ、学年末に論文にまとめる活動をしていきます。

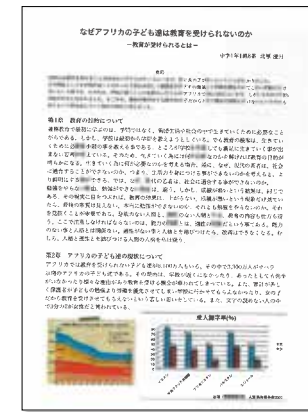
活動の過程で重要となるのは、いかにして正しい情報を手に入れるかです。ネット上にさまざまな情報が氾濫する今日においては、情報リテラシーの高い能力



①新聞記事がSDGsのどのゴールにつながるかを考える活動



②壁に掲示された新聞記事に、関連するSDGsのゴールを貼っていく。



③中学生が書いた論文

が求められます。先生方は、生徒に「確かな情報を手に入れよう。論文には必ず出典を書くように」と指導します。

最終的な成果物となる論文は、中1は1500字、中2は2000字、そして中3は2500字と、中学生にとってはかなり高いハードルが設けられています。しかし、どの生徒も自分自身が興味・関心のある課題であるため、ねばり強く取り組んで論文を完成させ、互いに評価し合って1年の活動を締めくくります。と同時に、SDGsについて理解を深め、さらに深く広く探っていきたいという気持ちをもつようになるのです。

SDGsが繋がっていることを発見

高校ではゼミ形式で、中学での活動を発展させた取り組みをします。高1・2年生が、SDGsの目標を踏まえた研究テーマを設定したゼミから一つを選んで所属し、テーマについて掘り下げていきます。

ゼミのテーマは「情報技術と創造力」「アートプロジェクト」「国連とは？ なんのためにあるのだろう？」と多岐にわたりますが、物事を大きくとらえる

テーマが多く、直接SDGsと結びつくように見えないものが多くあります。

高校での『地球思考プログラム』の中心を担う角龍司先生は言います。「中学のテーマが具体的であるのに対して、高校のテーマはあえてふわっとした感じにしています。あとで、『SDGsとどうつながっていたのか』という発見をしてほしいからです」

こうしたテーマの設け方は、物事を多角的に見ることにつながると言います。例えば「待機児童」の課題に取り組むにしても、ライフスタイルの変化という歴史的な視点もあれば、女性の社会進出やジェンダーの観点からの視点もあるからです。こうした見方から、生徒は、SDGsの17のゴールも、実はみんなつながっていることにも気付きます。

生徒たちはゼミでテーマを掘り下げた後、成果物を完成させる活動をしていきます。自ら考え、エビデンス（証拠）に基づいた結論を立て、それを発信する活動は、新・大学入試やAO入試などで求められる志望理由書を書く際にも役立つことが期待できます。

SDGsを核とした取り組みは、着実に成果をあげています。

各班のテーマと関連するSDGsのゴール

班	テーマ	関連するSDGsのゴール	班	テーマ	関連するSDGsのゴール
A班	フェアトレードチョコレート	1 貧困をなくそう、8 働きがいも経済成長も、10 人や国の不平等をなくそう	E班	レインフォレスト・アライアンス	10 人や国の不平等をなくそう、12 持続可能な消費と生産、16 平和と公正
B班	世界の女の子たちに教育を	1 貧困をなくそう、4 質の高い教育をみんなに、5 女性への平等、10 人や国の不平等をなくそう	F班	タンザニアの移動診療サービス	3 健康と福祉、12 持続可能な消費と生産
C班	認証マークのついた紅茶	3 健康と福祉、12 持続可能な消費と生産	G班	小学校の5 Rの取り組み	12 持続可能な消費と生産、13 気候変動に具体的な対策を、15 陸の豊かさを守ろう
D班	森林保護とリサイクル	12 持続可能な消費と生産、15 陸の豊かさを守ろう	H班	ユニセフは世界を救う	1 貧困をなくそう、2 質の高い教育をみんなに、3 健康と福祉、4 質の高い教育をみんなに、5 女性への平等、6 安全な水とトイレを世界中に、7 持続可能なエネルギー、8 働きがいも経済成長も、9 産業と雇用革新、10 人や国の不平等をなくそう、11 住み続けられるまちづくりを、12 持続可能な消費と生産、13 気候変動に具体的な対策を、14 海の豊かさを守ろう、15 陸の豊かさを守ろう、16 平和と公正、17 パートナーシップで目標を達成しよう

● 将来は地域との連携も



東京女子学園
中学校高等学校
黒川 八重教諭

『地球思考プログラム』の活動を通じて、生徒たちは長い文章を書くことが苦でなくなり、発信する力もつきました。昨年は、情報を文献やインターネットで入手していましたが、今年は外に出て話を聞いたり見学したりといった実地調査も取り入れています。さらに、今後は地域の方々や自治体などともコラボしていきたいと思っています。

● 的確な進路選択の礎に



東京女子学園
中学校高等学校
角 龍司教諭

高校では、最初はSDGsを強調しすぎず、最終的な成果がSDGsとどうつながっているのかを考えさせるようにしています。生徒は初めのリアクションは大きくありませんでしたが、だんだんイメージができてきています。

中学から高校2年までの取り組みを踏まえて、高校3年での進路選択が的確にできるようにつながっていくと期待しています。

学研の道徳教科書

×SDGs



SDGs17のゴールは、実はどれも、道徳科で考え、議論していくものです。子どもたち一人ひとりが、SDGsで扱う現代的課題を、他人事ではなく自分自身の問題として向き合い、考え、議論することが、道徳科の目指す授業の姿です。学研の道徳教科書でも、SDGs達成につながる歩み続ける人たちを紹介し、現代的課題を考える橋渡しをしています。



ESD*ユニット
「地球と地域の未来のために」が各学年にあります。

谷 真海さん

パラアスリート

2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピック。この東京でのオリンピック・パラリンピック開催を訴えるスピーチで、聴衆の心を大きく揺さぶったのが、谷真海（当時 佐藤真海）さんでした。

骨肉腫のため右足の膝から下を切断した真海さんでしたが、生来のチャレンジ精神で、アテネ、北京、ロンドンと、3回のパラリンピック（陸上競技）出場を果たしました。

真海さんは「自分の力を最大限に引き出す世界の一流スポーツ選手の姿を見て、日本の多くの人が勇気と希望を持ってほしい。」と願い、オリンピック・パラリンピック招致委員活動に参加。見事招致を成功させました。

障害のある人が、少しでもスポーツに取り組みやすい環境づくりを進めようとまい進する真海さん。結婚後もパラトライアスロンへ転向し、子育てをしながら世界での活躍を目指し練習に励んでいます。



『中学生の道徳
明日への扉3年』より
（「スポーツの力 佐藤真海」）



野口 健さん

アルピニスト

世界最高峰エベレスト（チョモランマ）登頂を達成した野口さんが下山の際に目にしたのは、酸素ボンベやテントや空き缶などのごみで登山ルートが汚されている現実でした。

「世界の、そしてアジアの最高峰だから、アジア人の手できれいにしたい。」

野口さんは2000年3月のチョモランマ清掃登山を皮切りに、日本の富士山清掃登山など数多くの清掃登山を重ねています。

野口さんは「環境にできる限り悪い影響を与えず、自然に親しむにはどうしたらいいの。休暇の楽しみだからといって、いい加減なごみの放置が許されるほど、自然の懐は深くない。今こそ、一人ひとりが、自然との付き合い方を真剣に考えるべきときだと思う。」と語ります。



『新・みんなの道徳6』より
（「チョモランマ清掃登山隊」）



雨宮 清さん

日建株式会社

雨宮さんは、自社で扱う建設機械を使ってもらおうと1994年に内戦後のカンボジアを訪れました。そこで目にしたのは、地雷に苦しめられている人々の姿でした。片足を失ったおばあさんの「この国を救ってください。子どもたちが安心して暮らしていけるように、助けてほしいのです。」という言葉が、いつまでも耳に残りました。

雨宮さんは帰国後、地雷除去機開発プロジェクトチームを発足。プロジェクトメンバーは日常の業務以外の時間を使って開発に力を注ぎ、3年後、建設機械の技術を応用して試作機を完成させました。部品を取り換えれば耕運機や種まき機として使え、農地復興もできる地雷除去機です。

雨宮さんを中心に開発した地雷除去機は今も地雷除去地域の最前線で活躍しています。



『中学生の道徳
明日への扉2年』より
（「危険地帯から実りの土地へ」）



ものづくり×SDGs①

●学習支援にも対応したデジタル教科書の作成
（学習上の支障の排除）



教科書・副読本は、誰もが等しく学べること、学べる環境が持続していくことを願って作成しています。

●環境に配慮した紙、インキ、印刷方式を使用
（エネルギーに配慮したものづくり）



●長時間の使用を可能にした製本の工夫
（資源効率化）



学研の保健体育 × 教科書

SDGs

体育・保健体育の学習内容には、心と体の健康、安全、防災、環境、スポーツなどがあり、SDGsとはとても深いつながりがあります。

- **心の健康**
いじめに関する学びが、平和と公正につながる（小／中）
- **オリンピック・パラリンピック**
国際親善、世界平和に対する国際的なスポーツ大会の役割を知る（中）

- **個人の健康を守る 社会の取り組み**
共に健康に生きる社会として、社会的活動やボランティアなどを紹介している（小／中）

- **生物多様性**
海や陸の豊かさとして、生物多様性の考え方を取り上げている（中：健康と環境）
- **野外スポーツ**
野外スポーツを通じて海や陸の豊かさを理解する（中）

- **環境の汚染と保全**
生活排水、海洋汚染などの環境問題、公害対策基本法などの対策を学ぶ（中：生活に伴う廃棄物の衛生的管理）

- **人類と地球の未来のために**
地球温暖化や低炭素社会について取り上げ、地球にやさしいライフスタイルの実践を呼びかけている（中：健康と環境）

- **循環型社会を目指して**
資源の枯渇や廃棄物の問題とその対策や3Rについて学ぶ（中：生活に伴う廃棄物の衛生的管理）

- **地域のさまざまな保健活動の取り組み**
地域の保健活動で健康が支えられていることを学ぶ（小）
- **生活に伴う廃棄物の衛生的管理**
生活に伴う廃棄物の衛生的管理、ごみの処理や循環型社会について学ぶ（中）

- **スポーツの始まりと発展**
スポーツを行うことは、すべての人にとって基本的な権利であるとしている（中）



- **自然災害に備えて**
貧困の原因の1つである自然災害による経済損失を防ぐ（小：けがの防止／中：傷害の防止）
- **スポーツ**
スポーツが幸せや貧困をなくすことにつながる（中）

- **食育**
バランスのよい食事が栄養状態を改善する（小：毎日の生活と健康／中：健康的な生活習慣）

- **健康って、どんなこと？**
健康について考える（小：生涯にわたる心身の健康の保持増進、身近な生活における健康への理解）

- **全般**
教科書・副読本の学習を通して質の高い教育を提供（小／中）

- **生殖に関わる機能の成熟**
ジェンダーについて考える（中）
- **生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現**
男女問わずスポーツで活躍している人を取り上げている（中）

- **飲料水・排水の衛生的管理**
水の役割と飲料水の確保、生活排水の処理を学ぶ（中：飲料水や空気、衛生的管理、生活に伴う廃棄物の衛生的管理）

- **スポーツと環境**
スポーツが環境に及ぼす影響や、環境に負荷をかけない取り組みを取り上げている（中：文化としてのスポーツの意義）

- **キャリア教育（職業教育）**
体育・保健体育の学習を生かせる健康・スポーツに関わる職業を紹介している（小／中）

- **低炭素社会**
低炭素社会を目指す生活の工夫、技術の開発を取り上げている（中：飲料水や空気、衛生的管理、生活に伴う廃棄物の衛生的管理）

体育・保健体育の教科書・副読本づくりは、SDGsの普及・啓発や目標達成に向けた取り組みそのものであると考えています。

特につながりがある2つの目標



①『新・中学保健体育』p.50～51「人類と地球の未来のために」



②『みんなの保健5・6年』p.55「地域のさまざまな保健活動」



③『みんなのほけん3・4年』とびら「健康って、どんなこと？」



④『新・中学保健体育』p.164～165「人々を結び付けるスポーツ」

ものづくり × SDGs ②

教科書・副読本は、誰もが等しく学べること、学べる環境が持続していくことを願って作成しています。

- **教科書バリアフリー法に基づく拡大教科書の作成**
（弱視者への配慮、アクセシビリティの向上）



- **ユニバーサルデザインに配慮**
（色覚特性のある人への配慮、アクセシビリティの向上）



- **ユニバーサルデザインフォントを使用**
（アクセシビリティの向上）



学研の幼児月刊絵本 × SDGs

SDGsの17のゴールには、幼児期の子どもたちの生活に直結する、身近で子どもたちが関心をもちやすいテーマにつながる要素が多く含まれます。

学研の幼稚園・保育園・こども園向け月刊絵本では、各年齢の発達に合わせて各々の目標に関連したテーマを紹介することで、SDGsで扱う重要な課題を初めて意識するきっかけを提供しています。

健康

幼児期は、歯磨きやトイレ、手洗い・うがいなど、生活習慣の基礎を身につける時期。絵本を通して、健康的な生活を送るためのスキルや目的を伝えます。



②・3歳児向け月刊絵本「みみちゃんえほん」



防災

月刊絵本各誌で必ず取り上げている防災テーマ。自分たちが生活する園や地域での災害時の身の守り方を伝えることで、防災への意識を高めます。



④4歳児向け月刊絵本「プリン」

社会

職業に関心をもつきっかけとして、さまざまな仕事を紹介。道具や制服、仕事内容やものづくりの工程などを扱い、将来の夢への憧れだけでなく、社会や技術への興味も高めます。



⑤5歳児向け月刊絵本「びっかり」

世界

4・5歳児向けの月刊絵本では、世界に視野を広げます。世界中の絶滅危惧種の動物を紹介し、環境問題について考えるきっかけを提供しています。



④4・5歳児向け月刊絵本「よいこのがくしゅう」

環境

「学研ほたるキャンペーン」

全国の子どもから大人まで多くの参加者の協力を得て、環境指標となるほたるの生息状況を調べています。身近な自然に関心を向けることから、地球全体の環境保全への意識を高めます。



月刊絵本5月号に付く「ほたる」のレポートを元に、みんなでほたるマップを完成させます！

リサイクル

身の回りにあるものを再利用する、リサイクル工作を紹介しています。子どもたちが大好きなおもちゃ作りや工作が、環境保全の意識を育てます。



3・4歳児向け月刊絵本「よいこのくに」



Gakken × SDGs

SDGsに共通する理念の下に 社会課題の解決を目指す

SDGsが目指すべき世界像（2030アジェンダ）と、「誰一人取り残さない」という基本理念は、すべての人が心ゆたかに生きることを願う学研グループの理念と重なります。

学研グループは、EdTechやSTEAM教育をはじめとした新たな教育手段による質の高い教育を提供することはもちろん、挨拶や困った人に手を差し伸べることができるような人間性ゆたかな教育の重要性も認識し、各種の教育事業の現場で実践しています。

中でも17のゴールすべてに関わる内容をもつ環境教育、保健体育、道徳に関する事業は、学研グループのSDGsの取り組みそのものといえます。

学研グループはSDGsの3、4、11を重点目標に設定し、各種事業を通してSDGs達成に寄与していきたいと考えています。

学研グループは創業者・古岡秀人の「戦後の復興は教育をおいてほかにない」という強い信念の下、一貫して教育を軸に社会課題の解決を目指してまいりました。さらに近年、医療福祉分野では、サービス付き高齢者住宅をはじめ、認知症高齢者対応のグループホームなどを展開。高齢者向け住宅を拠点として、学研グループのリソースを一体化し、行政機関などとも連携しながら暮らしをサポートする『学研版地域包括ケアシステム』を推進。0歳から100歳を超える人々が、心ゆたかに生きることのできるサービスを提供しています。

学研グループのSDGs重点目標



Gakken



学研グループは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

SDGs×Gakken 2019年11月発行

お問い合わせ先：株式会社学研教育みらい 道徳編集室 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

発行所：株式会社学研教育みらい 印刷：凸版印刷株式会社 表紙・本文デザイン：増子文 DTP：株式会社明昌堂

9300007175

●この冊子は、環境に配慮した紙、インキ、印刷方式を使用し、ユニバーサルデザインに配慮して製作しています。